

弔 辞

貞方敏郎君

あなたは去る昭和55年5月3日の夜、7時40分、69歳を一期として、卒然としてあの世へと旅立たれた。69歳と言えば、わたしより10歳も年下である。とは言え、あなたは中年以後しばしば大病にとりつかれた。その度毎に令夫人の手篤い看病並にご息方の熱烈な回復への祈願によって、不死鳥の如く、弱い細い体を甦らされた。このようにして幾度も死の淵を覗かれたのであったから69歳の生涯は本質的には決して短いものでなかったかも知れない。

あなたが夜な夜な不眠に悩まされたことも有名である。睡眠薬をよく愛用された。同じ悩みをもつ私とはよく話が合った。まだ「プロバリン」が市販で自由に購入できた頃、その粉末だ、錠剤だ、とお互に飲み続け、どちらの体に睡眠薬がヨリ多量に残留していることであろうか、と話し合って哄笑したものであった。

あなたが昭和8年3月、同志社大学文学部英文学科を卒業されるに当って、提出された卒業論文はウォルター・デ・ラ・メエアの児童詩についてであった。そもそもあなたは学生時代から英語学に打ちこんでいられたが、英文学科なら英文学についての卒業論文をという若き日のハントレー先生の主張もあり、それに当時まだその指導者を欠いていたため一時的に遠廻りをされたに過ぎない。ご卒業後はひたすら英語学の研究に傾倒された。近時若い人たちが新言語学に走られるのを苦々しく思われながら、自らは伝統文法を固持して倦まれることがなかった。そして55歳近く、又、60歳近くの2回に亘って伝統文法の重要な拠点であるコペンハーゲン大学に留学され、わが国では数少ないデンマーク語の権威でもあった。

あなたが音楽の愛好家であったことはあまねく知られている。殊に弦楽器はどの種の和洋楽器もあなたの指に一度触れば妙なる音を出したが、殊にチェ

口は最も得意とされたものである。同志社オーケストラの創始者の一人でもある貞方君よ、そのオーケストラは50数年の歴史をもち、この夏にはアメリカへ演奏旅行に出かけると聞く。

あなたは一面ヒューモアの人でもあった。真面目な顔で時にきびしい発言をされてもそれはあなたの人徳と、巧まざるヒューモアのため飄々たる雰囲気醸し出し、相手に不快の念を起さすようなことがなかった。本当に徳なお人柄だったですよ、あなたは。

お別れに際して、あなたについての思い出はつきない。昔、東本願寺近くに住まわれていた時代からの長い年月の間には多くのことがあった。だがいくら駄弁を弄しても、も早、あなたの難聴の方の耳には勿論のこと、良くききわけられた耳朶にももはや達しない。嗚乎、貞方君よ、君の霊は今、安らかに聴きよい方の耳を傾けて天国のあの靈妙の音楽にきき入っておられることでありましょう。

昭和55年5月5日

同志社総長 上 野 直 蔵